

バードリサーチ ニュース

2010年11月号 Vol.7 No.11



Butastur indicus
Photo by Nonaka Jun

参加型調査

サンショウクイプロジェクト

— 冬季アンケートのお願い —

三上かつら

東日本では美しく冠雪した山々が見られる季節になってきましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。そんな寒さの折ですが南方系の鳥、サンショウクイに関するお話です。

今年の5月より、リュウキュウサンショウクイの分布状況を調べるプロジェクトが始まりました。会員の皆様より多くの情報をいただき、リュウキュウサンショウクイの分布拡大の現状がわかってきました。プロジェクトは今後も続きますが、これまでにわかってきたことをご報告いたします。なお、以下のまとめは、お寄せ下さった情報に加え、バードリサーチのWebデータベースの「フィールドノート」および文献調査等によって2010年10月20日までに得られた情報を統合したものです。

この5年間における確認状況

2006～2010年の間にリュウキュウサンショウクイが確認された県を、濃いオレンジ色で示してあります(図)。

九州では、長崎県を除く全県で確認されています。九州以外では、愛媛県、高知県、香川県、広島県で、さらには2008年には奈良県でも確認例があることがわかりました。リュウキュウサンショウクイの分布は確実に広がってきているようです。

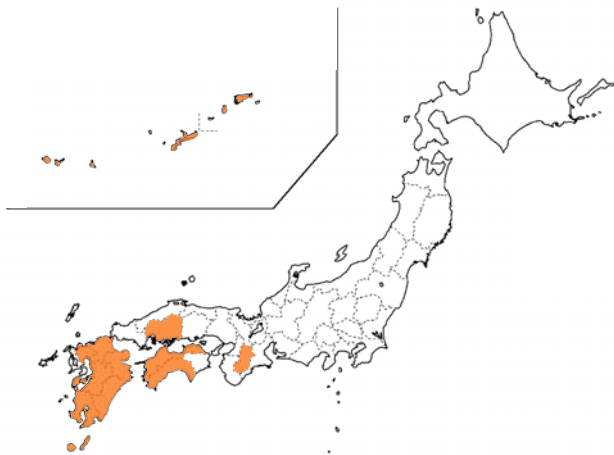


図. 2006年から2010年の間に、亜種リュウキュウサンショウクイが確認された県をオレンジ色で示す。

冬季の状況について

各県において、リュウキュウサンショウクイが初めて記録された季節に着目すると、冬季であることが多いようです。たとえば宮崎県は1月、熊本県は2月、福岡県は12月、愛媛県は11月、広島県は12月、奈良県は2月などなど。冬季に発見率が上がるためなのか、越冬前に分散しているからなのかはまだわかりませんが、季節外れの「ピリリリ」いう鳴き声が聞こえたら注意してみてください。

また、冬には「エナガなどの混群にリュウキュウサンショウクイが混じっていた」という観察例があります。暖かい沖縄などでもメジロなどと行動をともにしていることがあるようです。これからの季節、混群を見かけたら、ちょっとスリムな白黒の小鳥が混じっていないか、気にしていただけるとありがたいです。

アンケートのお願い

リュウキュウサンショウクイの分布拡大については、普通のサンショウクイ(亜種サンショウクイ)との関係をみながら考察していく必要があると感じています。ですので、「今は普通のサンショウクイしかいない」という地方の方も、「リュウキュウどころか普通のサンショウクイもあんまりいない」という地方の方も、これから、何らかの変化がみられるかもしれません。その変化は今年の冬かもしれません。リュウキュウサンショウクイは山地の広葉樹林だけでなく、混交林や低地の社寺林などでも確認されています。そういう場所に行った際はぜひ聴き耳を立ててみて下さい。両亜種について確認情報をお待ちしております。情報は以下のフォームよりご入力ください。よろしくお願いいたします。



写真. リュウキュウサンショウクイ。額は見えないこともあるが、胸のあたりが黒っぽいのは比較的わかりやすい。

■ サンショウクイプロジェクトのホームページ
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/sanshokui/

書籍紹介

フィールドの観察から論文を書く方法 —観察事例の報告から研究論文まで—

濱尾章二 著／文一総合出版 定価1200円（税別）

論文と聞くとなんとなくお堅いイメージがあり、初心者には「難しい、自分にはまだ早い、どうやって投稿していいのかわからない」と思ってしまうところですが、そんなイメージを一新させてくれるのがこの一冊です。

本書では、フィールドで観察した情報のまとめ方から学術雑誌への投稿の仕方まで、具体的に良い例、悪い例をあげてとてもわかりやすく書かれています。著者の濱尾さんは、アマチュア研究者時代にもたくさんの論文を学術雑誌に掲載されていて、「もがき苦しみながら書き直しを繰り返した」と冒頭で語っています。たくさんの苦勞をされた濱尾さんだからこそ、ここまでわかりやすい内容の本が出来上がったのだと思います。本書の基礎編には「観察や調査の中でおもしろいと感じる出来事が論文の原点になる」と書かれています。皆さんも観察中に「おもしろい」と思う出

来事に遭遇したことがあるのではないのでしょうか。結果をまとめてみると新たな発見があるかもしれません。また、図表の使い方や構成の組み立て方は、論文以外の活動報告書や発表資料を作成する際の手助けにもなってくれるでしょう。アマチュア研究者や学生の方に特にお勧めしたい一冊です。

【本山裕樹】



研究誌紹介

FIELD WORKER 特定非営利活動法人 希少生物研究所 研究報告書-1 : NPO法人 希少生物研究所

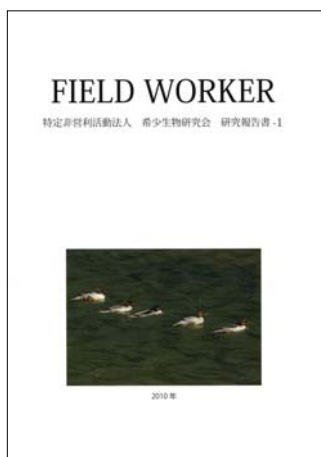
Woodpecker Vol.2 2010 香川県野鳥記録・研究報告集: 香川の野鳥を守る会

今年発刊されたFIELD WORKERという研究誌と2007年に発刊されたWoodpeckerの第2巻をご寄贈いただきました。ありがとうございます。

FIELD WORKERは、大分県に本拠があるNPO法人希少生物研究会が発行しています。助成金を受けて発行されているので、グラフもカラーで見やすく、観察記録も全てカラー写真が使われていて、頒布は1冊500円になっています。

今号にはハイタカの成鳥と幼鳥の渡り時期の違いや大分県でのヤイロチョウの繁殖初記録、大分県でのアカアシチョウゲンボウの初観察記録、コミズナギドリとの識別といった観察記録を主体とした12本の報告が掲載されています。ハイタカの渡りは福岡県の立石山と佐賀県の鏡山で2003年から2010年にかけて毎年春と秋の渡りの時期に行った観察をもとにまとめられていて、秋の渡りでは違いが見られなかったのに、春の渡りでは成鳥の方が早く、幼鳥が遅く渡っていたことが報告されています。

Woodpeckerは、香川の野鳥を守る会が発行しており、こちらは1冊1000円です。2巻にはカラシラサギの香川県初記録やコシヤクシギの観察記録、高松市御厩池定点観察記録など20本の観察記録と研究報告のほか、トモエガモの大量渡来やハシボソガラスの部分白化個体の記録などが9件掲載されています。



どちらの冊子も貴重な観察記録を埋もれさせたくないという思いから編集されています。バードリサーチでは、様々な鳥の生息状況の変化をモニタリングしており、これを活動のひとつの柱にしています。その際、過去にさかのぼって長期的な変化を調べようとすると、観察記録が文献として残されているかどうかがとても重要だと気づかされます。なにも「初」であったり、科学的に斬新であったりするものばかりが重要というわけではありません。今回ご紹介した2誌のように普通の観察記録も含めて後世に残していこうという活動が全国で続いていくといいなと思いました。紹介した研究誌の掲載内容や、入手の方法は下記のホームページをご覧ください。たくさん購入してもらえれば、継続のための力にもなると思います。

【高木憲太郎】

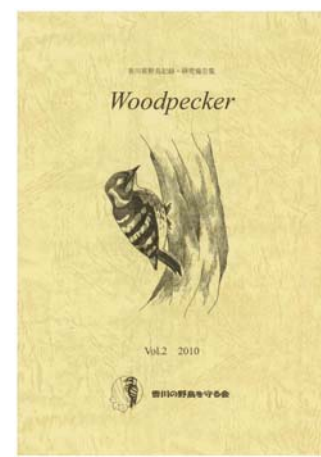
■NPO法人希少生物研究会

掲示板より FIELD WORKERについて

http://npo-wtw.green.cocan.jp/?m=listthread&t_id=41

■香川の野鳥を守る会 Woodpeckerのホームページ

http://www5d.biglobe.ne.jp/~kogera/hogo/wp_woodpecker.htm



参加報告

フライウェイパートナーシップの ワークショップに参加しました。

神山和夫

フライウェイパートナーシップ

東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(以下、フライウェイパートナーシップ)は、1996年に発足した渡りをする水鳥の保護のための国際組織で、ロシアからオーストラリアにかけてのフライウェイに位置する国々から政府やNGOが加盟しています。フライウェイパートナーシップの主な活動は「重要生息地ネットワーク」で、これは一定の基準を満たす生息地を「フライウェイサイト」として認定して、そのサイトの評価を高めることによって保全を推進し、さらにサイト関係者同士の交流や情報交換を支援しています。このような重要生息地はフライウェイ全体で199サイトが認定されており、先ごろ風蓮湖・春国岱が日本で28番目のサイトとして認定を受けました。

各国のモニタリング調査

これまでのフライウェイパートナーシップの活動は重要生息地ネットワークが中心でしたが、活動目標のひとつとして「モニタリング調査と情報交換」ということも掲げられていました。そこで、9月28～30日にフライウェイパートナーシップの事務局がある韓国の仁川(インチョン)に参加各国のNGOや研究者が集まり、フライウェイでのモニタリングに関するワークショップが開かれました。バードリサーチも日本でシギチドリやガンカモのモニタリング調査をしていることから、このワークショップに招待していただいたので、私と守屋が参加してきました。

ワークショップの目的は、今年12月にカンボジアで開かれるEAAFパートナーシップの総会で決めるモニタリング体制の案を作ることで、各参加者が自国のモニタリング調査体制について発表を行い、その後、どのような国際協力を行うことができるかを話し合いました。中でも私にとって興味深かったのは、隣国でありながらよく知られていなかった韓国と中国の調査体制についてでした。

韓国では1999年から毎年1月に全国一斉調査が行われています。対象はガンカモ、サギ、シギ・チドリなどの水鳥全種で、調査地は百数十サイトですが、長距離のラインセンスで海岸と主要河川をほぼ網羅しています。それに加えて、西海岸の8サイトでは春と秋にシギチドリの調査が行われています。この2種類の調査はワークショップに参加者していた韓国国立生物資源研究所(NIBR)が実施しているものなので、今後フライウェイパートナーシップを通して国際的な情報共有が進むことを期待しています。他にも政府機関の調査としては、10年に1度行われるメッシュ調査(鳥以外も対象)や海鳥コロニー調査、そしてNGOが実施している調査ではツルやクロツラヘラサギの調査が定期的に行われているということです。またガン類については、全国的なコーディネートは行われていないものの、渡り時期に各

地で頻繁なカウントをしている団体があるということでした。

一方の中国では、定期的なモニタリング調査が行える体制はまだ広がってはいませんが、長江流域のガン類とハクチョウ類の越冬地では年1回か毎月の調査が行われています。この地域はガン・ハクチョウ類の主要な越冬地であるため、個体数についてはかなり把握できているようです。そして近年では中国でもバードウォッチングが盛んになりつつあり、各地の観察団体が連携していくつかの地域でモニタリング調査が始まっているそうです。

国際的な協力体制が必要

日中韓が越冬地になっているガンカモ類や、中韓の黄海沿岸地域が渡りの大動脈で、東南アジアからオーストラリアにかけて越冬するシギ・チドリ類など、複数の国をまたいで移動する水



図1. 参加者による記念撮影。

鳥の保護のためには国際協力が不可欠です。そのための基礎となるのが個体数や生息地のモニタリング情報です。日本も含めて国内においてかなりのデータ収集が進んでいる国は多く、これからはデータを国際的に共有して、フライウェイ全体で水鳥類の生息状況をモニタリングしていることが必要です。

干拓が進むインチョン

会議が開かれた韓国では、西海岸の干潟の干拓や、四大河川事業と呼ばれる河川改修事業のために水鳥の生息地が失われつつあります。写真2はフライウェイパートナーシップ事務局があるビルから撮影



写真2. 仁川の風景。

したのですが、なんと広大な干潟を干拓している埋立地の上に建っていて、周囲ではビルの建設ラッシュが続いていました。

自国の干潟の大部分を埋めてしまった日本人が言うものはばかられますが、韓国は開発の速度をゆるめないと、取り返しの付かない生物多様性の喪失が起きてしまうのではないかと心配です。

■東アジア・オーストラリア地域

フライウェイ・パートナーシップ

<http://www.sizenken.biodic.go.jp/flyway/>

ヘラシギ 英:Spoon-billed Sandpiper 学:*Eurynorhynchus pygmeus*

1. 分類と形態

分類: チドリ目 シギ科

全長: 140-160mm 露出嘴峰長: ♂20-22mm
 翼長: ♂98-105mm ♀21-23mm
 ♀101-106mm ふ蹠長: ♂19-22mm
 ♀21-22mm
 尾長: 37-39mm
 体重: 27.0-34.5g (2002年実測値)
 ※計測値は主にPrater, 1977. による。

羽色:

繁殖羽では頭部, 首から胸上部までにかけてうすい茶色の縞模様を持つ赤褐色で, 胸下部に脇の方が濃くなった褐色縦斑の帯状部分があり, 腹部は白い。頭部から胸上部の赤褐色はオスの方が濃い。非繁殖羽では広い眉斑, 額および喉を含めて下面は明るい白色で, 胸の横および耳羽には濃い縦斑を持つ。上面は灰白色で白い羽縁を持つ(写真1)。幼鳥は, 頭頂が黒褐色でバフ色の縦斑をもち, 上面の黒褐色の羽はバフ色および白色の羽縁を持ち, 背中に不明瞭なV模様が見える。バフ色を持たない個体もいる。



写真1. ヘラシギ成鳥夏羽。

鳴き声:

鋭くフィーツ, ピリリー, などと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

シベリア極東部のチュコト自治区とカムチャツカ半島東北東部コリヤーク自治区にかけた沿岸部で繁殖し, カムチャツカ, サハリン, 沿海州, 日本, 韓国, 台湾, 中国などユーラシア大陸東海岸を經由して渡り, ベトナム, マレーシア, タイ, ミャンマーなど東南アジアからバングラデシュ, インド東部に至る海岸で越冬する。香港のマイポ湿地, ハンチョウ(杭州), シンガポール, セイロンなどでも越冬の記録がある。また迷鳥として, 北アメリカ大陸の米国アラスカ州, アリューシャン列島, カナダ・ブリティッシュコロンビア州, また内陸アルバータ州の観察もある。

生息環境:

繁殖期は, 北極圏ツンドラ地帯の海岸から数キロの地域で, 淡水の湖近くを利用して営巣する。非繁殖期はどちらかというところ砂地の多い, 河口, 干潟を生息地とすることが多い。近年日本では埋め立て地の砂泥部で採餌することも多い。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 越冬期 繁殖期 渡り

繁殖地にオスよりもメスがやや遅れて到着し, ペアリングのディスプレイ行動が始まる。一夫一妻。場合に

よっては一妻多夫。営巣地への固執度は高いと考えられ, 同じペアが10年後に同じ場所で営巣した例も観察された。

巣:

北極圏ツンドラ地帯の水辺に近く, 丈の低いさまざまな種類の植生と砂地などの入り交じったモザイク状の環境を好んで営巣する。さまざまな植生がモザイク状となった環境の中で, 矮性のヤナギ類や地衣類などを使って直径5cm程度の浅い巣を作る(写真2)。

卵:

大きさは約32mm×23mm, 質量約8g, 一腹卵数は4卵である。天敵などの理由で卵が失われた場合, 再度産卵する場合もあり, その場合は多くが3卵である。卵は, 茶色がかったオリーブ色で褐色の斑に覆われている。



写真2. ヘラシギの巣と卵。

抱卵・育雛期間:

産卵は6月から7月中旬。抱卵期間は21.5~23日。抱卵は雌雄交代して行う。育雛期間は約2週間。少なくとも育雛期初期は雌雄ともヒナの世話をするが, 繁殖期後期は, 繁殖地のメスの数が減り, オスが世話をすると考えられる。

秋の渡り:

繁殖しなかった成鳥は7月初旬に出発。繁殖に関わった成鳥の場合, メスは7月中下旬, オスは1週間から2週間遅れて8月上旬までに繁殖地を離れる。幼鳥は8月上旬から渡り始め, 8月中旬にはすべての個体が繁殖地からいなくなる。繁殖地以外の情報は少なく, 個体群ごとの越冬地, 渡り経路の詳細もわからない。しかし, 最もデータの豊富な日本において, 個体数の減少した近年の観察のほとんどが, 過去に観察情報のある場所に限られていることから推測すると, 個体群ごとに決まった経路を通って渡りをしていると考えられる。

春の渡り:

越冬地を離れるのは3月中旬から4月中旬とされており, ベトナム, バングラデシュなど越冬地北部での終認は4月半ば過ぎである。トウネン, ハマシギなどの群れに混ざって渡ることが多い。繁殖地への到着は6月初旬, 雪解け水が水たまりや池になる時期である。

4. 食性と採食行動

特徴のあるヘラ状の嘴をどのように使って採餌するかということは多くの人々の関心の的である。繁殖地における観察によれば, 空中の餌を捕える採餌行動も観察されている。つつく, つまむなどの使い方と比べ, ヘラサギ類



写真3. 採餌するヘラシギ。

のような嘴を横に動かして水面のえさをすくい取る採餌行動が際立って多いという観察はされていない。中継地, 越冬地での砂質の生息地においても, 嘴を左右に動かす行

動と、上下に動かすついでに行動の両方がみられる。ヘラ状のくちばしを左右に動かす、またくちばしを中心に体を回す採餌行動は、トウネンなどの群れの中から見分けるときの助けとなる。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 推定個体数と保護上の課題

ヘラシギが登場する最初の文献は、19世紀末のフィンランドの冒険家の紀行文に、「チュコト地方の王にくちばしのヘラになった鳥をごちそうになった」との報告があり、種としては古くから知られている。調査は、1970年代半ばにロシアのコンドラージェフと1980年代半ばにトムコヴィッチが繁殖地でおこなっている。1970年代の調査では3000から4000つがいとされていたが、1980年代には2000つがいと推測されている。しかし、2000年にロシア科学アカデミーが繁殖地において再開した国際北極圏踏査の結果、繁殖つがい数が1000つがい(全個体数2500羽)を切っていることが確認された(Tomkovich *et al.* 2002)。

この状況を憂慮した北極圏踏査メンバーを中心として、調査のみならず保全活動にも積極的に取り組むことを目的とした「ヘラシギ回復グループ」が2004年に結成され、2004～5年にかけて越冬調査も開始された。繁殖地における調査においては、2000年以降、繁殖に関わるつがい数の激減が確認された。2003年調査に基づくつがい数は402～572つがい(全個体数1206～1716羽)(Syroechkovski 2005)、2009年の調査では150～320つがい(個体数450～1000羽)と推計されるまでに至っており、このまま放置すれば、まもなく絶滅することが確実な状況である。

越冬地においては、1989年にバングラデシュ・チッタゴン近郊の砂州において202羽の群れが発見されて以来、大きな群れは観察はなされていない。特に、ベトナムのシュアン・トゥイでは1990年代には30羽近くの群れも観察されていたが2000年以降減少し、2008年には観察がない。タイにおいても2桁の観察は少ない。こうした中で、2007年、08年にミャンマーで観察された総数90羽近くは、これまでほとんど記録のなかった地域であったことから、現在の越冬地の中心がミャンマーとバングラデシュにあることを示すものであり、重要な越冬地として、これらの国で集中的に保全対策に取り組む必要性を示している。

● 各種レッドリスト

ヘラシギの個体数は越冬地での確認が困難であったため、繁殖調査に基づいて個体数推計が行われ、以下の危機の度合いに分類されている。Waterbirds Population Estimate 第3版(2002)および第4版(2006)では、2000年の調査による報告に基づき個体数を3000羽程度として、Endangeredに分類されている。IUCNレッドリストは2004年の改訂まではVulnerableとしていたが、同じ情報に基づき2004年にEndangered(EN)、2008年からはCritically Endangered(CR)とされている。また、環境省のレッドリストでは2002年から改訂作業が行われ、2006年12月に発表されたリストではEN(絶滅危惧IB類)からCR(絶滅危惧IA類)に危機の度合いが高められた。

● 脅威とそれに対する対策

2006年12月には、タイにおいてヘラシギの渡りルートにあたる各国の代表を集めて今後の取り組みについてのワークショップが行われた。これにより、各種の脅威が明らかになり、渡り性生物に関するボン条約(CMS)の保全行動計画案に関する意見集約を行った。主な脅威は繁殖地では、天敵、開発、狩猟の問題。中継地では、開発に起因する生息地喪失の問題。越冬地では、狩猟圧と今後起こるであろう開発の問題が指摘された。この問題は現在も続いている。特に、ミャンマーとバングラデシュという主要越冬地において、住民の生活の質の向上と結びついた保全策が喫緊の課題である。

6. 引用・参考文献

- Andreev, A. V., Chan, S., Crosby, M. J., Subramanya, S. & Tobias, J. A. 2001. Threatened birds of Asia: the BirdLife International Red Data. BirdLife International, UK.
- Chandler, R. 2009. Shorebirds of the Northern Hemisphere. Christopher Helm, London.
- Hayman, P., Marchant, J. & Prater, T. 1986. SHOREBIRDS - AN IDENTIFICATION GUIDE -. Houghton Mifflin Company, Boston.
- International Union for Conservation of Nature. 2010. *Eurynorhynchus pygmeus*. In: IUCN 2010. IUCN Red List of Threatened Species. 2010.4. <www.iucnredlist.org>. Downloaded on 12 November 2010.
- Li, Z.W.D., Bloem, A., Delany, S., Martakis, G., & Quintero, J. O. 2009. Status of Waterbirds in Asia - Results of the Asian Waterbird Census; 1987-2007. Wetlands International, Kuala Lumpur, Malaysia.
- Message, S. & Taylor, D. 2005. Waders of Europe, Asia and North America, Helm Field Guides. Christopher Helm, London.
- Prater, A.J., Marchant, J.H. & Vuorinen, J. 1977. Guide to the Identification & Ageing of Holarctic Waders, BTO Guide 17. British Trust for Ornithology, Thetford, Norfolk.
- Syroechkovski, Jr. E. E. 2005. The Spoon-billed Sandpiper on the Edge: A Review of Breeding Distribution, Population Estimates and Plants for Conservation Research in Russia. in Straw, P. 2005 Status and Conservation of Shorebirds in the East Asian-Australasian Flyway; Proceedings of the Australasian Shorebirds Conference 13-15 December 2003, Canberra, Australia. Wetlands International Global Series 18, International Wader Studies 17, Sydney, Australia: pp. 169-174.
- Tomkovich P.S., 1995 Breeding biology and breeding success of the Spoon-billed Sandpiper *Eurynorhynchus pygmeus*. Russ. J. Orn. 4: 77-91 (In Russian with English summary.)
- Tomkovich, P. S., Syroechkovski, Jr. E. E., Lappo, E. G. & Zoeckler, C. 2002. First Indications of a Sharp Population Decline in the Globally Threatened Spoon-billed Sandpiper, *Eurynorhynchus pygmeus*. Bird Conservation International 12: 1-18.
- Wetlands International. 2006. Waterbird Population Estimates - Fourth Edition. Wetlands International, Wageningen, The Netherlands.

執筆者

柏木 実 NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
(財)日本野鳥の会(囑託専門委員)



20年間の中学校教員を退職した時、干潟の泥の中で、標識環によって風蓮湖を通ったトウネンがオーストラリア西海岸に来ていることを知り、シギ・チドリ類の渡りの素晴らしさと、過酷さに気づきました。そこから国際的な湿地保全活動と、シギ・チドリ類の調査及びその後方支援を続けています。フィールドになかなか出られないことが悩みです。

学会報告

日本鳥学会2010年度大会参加報告

2010年度の日本鳥学会が9月18日～20日の日程で、千葉県船橋市の東邦大学習志野キャンパスで開催されました。会場には、大学教員、研究者、学生、民間、一般の方と多様な方が参加されており、さまざまな鳥について話題が提供され、活発な交流が行われていました。口頭発表は、2会場51題、ポスター発表が112題ありました。そのほかに自由集会、公開シンポジウム、黒田賞受賞講演と3日間盛りだくさんでした。

残し餌からみた繁殖期における アオバズク *Ninox scutulata japonica* の食性 ○溝田浩美・大谷剛

口頭発表では、在野の研究者にスポットを当てたいバードリサーチとしては、アオバズクの残し餌の発表が印象に残りました。ヒナに与える時にムシり落とされた羽や固い頭部などの1000を超える昆虫の一部のサンプルを同定し、その同定された昆虫と、近隣の夜間採集で捕えた昆虫の比較から、選択的に餌を捕まえているのではないかというものでした。痕跡が残らない餌は過少に評価してしまう可能性はありますが、残し餌からアオバズクの食性に迫り、今後の成果も楽しみな内容でした。

そのほか、いろいろなメディアに取り上げられ最近話題の三上修さんのグループのスズメの発表に、入りきれないほどの聴衆が集まり、注目の高さがうかがえました。

● 黒田賞受賞講演

今年度から鳥類学を担う若手研究者を対象として日本鳥学会黒田賞が創設されました。

その栄えある第1回の受賞者は、バードリサーチでもシギ・チドリ調査の解析などでお世話になっている農業環境技術研究所の天野達也さんが選ばれました。受賞講演では、国土・景観・局所といったスケールの異なるアプローチによって保全生態学に寄与する研究を進めてきた結果、多様なスケールの研究が必要であり、それぞれのアプローチが鳥類の保全につながっていくと考えているという、聴衆が共感できる講演でした。



写真1. 黒田賞の授賞式。天野達也氏と日本鳥学会の江崎会長。

● 参加してみましょう



写真2. ポスター発表会場。

学会と聞くと、敷居が高そうなイメージがありますが、参加費を払えば誰でも参加できますし、興味のある話題だけ聞くこともできます。まずはポスター発表会場がおすすめです。目前で説明してくれますし、質問もしやすく、納得いくまで聞けると思います。新しい知見や同様の興味をもつ人を見つけてことができるでしょう。年毎に開催地は違いますが、お近くで開催される際はぜひ参加されることをおすすめします。来年は9月に大阪市立大学で開催されます。

【守屋年史】

おしらせ

「野鳥の不思議解明最前線」の連載開始

2006年から5年間、バードウォッチングマガジンBIRDER誌上で、鳥の研究の最新情報を紹介する「野鳥の不思議解明最前線」を連載してきましたが、その連載が2010年12月号をもって終了しました。そこで、この連載をバードリサーチのホームページ上で、普通会员用のコンテンツとして続けていくことにしました。年内に発行する号はお試し用として、ホームページ(http://bird-research.jp/1_shiryo/fushigi/)からどなたでも見ることができます。最新号では、

騒音に応じて自在にさえずりをかえるメキシコマシコについて紹介しています。ぜひご覧ください。

なお、来年からは普通会员以上の方のみのコンテンツになります。ご覧いただくためのパスワードは会費の更新の際にお知らせさせていただきます。

【植田睦之】



バードリサーチニュース 2010年11号 Vol.7 No.11

2010年11月22日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: サシバ